

## 巻 頭 言

## これからの学生教育

明倫短期大学 学長

花 田 晃 治



入学選抜をめぐる環境変化、高等学校での履修状況や選抜方法の多様化等を背景に入学者の様相が変化するとともに、入学者の学習意欲の低下や目的意識の希薄化などが顕著になってきていることが指摘されるようになった。本学においても多くの教員が学力低下を問題視し、思考力や表現力、主体性の能力が低下しているという。少子化を背景に、入学を希望するほとんどが進学できる時を迎えたことも大いに関係しているように思う。さらに、新聞報道によれば、東京大学による全国の国公立127大学の学生の意識調査において、四人に三人は「自分で勉強するより、必要なことはすべて授業で扱ってほしい」と考えており、授業をきっかけとして後は自分で学びたいと考えている学生は少数派で、受け身の傾向の強い学生像が浮かび上がったという。自分のレベルにあった授業を希望するというが、そのような授業方法が果たしてあるのであろうかとも思うが、学生が理解してくれなければ全く無用の授業をしていることになるのであるから、ここは何か考えてゆかなければならないと思う。

18歳人口減少期にあたり学生確保が困難になってきた現状のなかで、学習習慣、学力、学習動機などの面で、「多様な」学生を受け入れざるを得なくなっている「多様化」への対応が緊急の課題となっている。

解決の方策として指摘されているのが、「初年次（新入生）教育」の重要性である。その中には「学力低下」「学力格差」対策も含まれるかもしれないが、これは当然の事実であるとして受け止め、それよりは大学が学生のために積極的に考えなければならないのは、「大学とはどういうところか」「明倫短大でなにができるか」「人間関係づくり」「学習（到達）目標づくり」「将来の人生計画づくり」「計画的に時間を使うには」「勉強の仕方」さらには「社会生活を送る上で身につけておくべきこと」などについて、どうかかわればよいかである。このことは、中退率を下げることに働くかもしれない。

とはいえ、こうした初年次教育については最近になってその必要性が指摘されるようになったのであり、その実施方法のノウハウがあるわけではない。従来の教育でさえ、教員の負担が大きいのに加えて、こうした新しい試みをどう実行してゆくかについて、教職員が知恵を振り絞って良質な学生の輩出に向かって努力するという意識の確認が重要であろう。